

教育界における口演童話の受容
—教師による久留島武彦の実演記録を例として—

中 村 美和子*

Effective Teaching Strategies:
Performances of a Japanese-Style Storytelling Authority
Documented by a Teacher in 1928

NAKAMURA Miwako

Abstract

Japanese-style storytelling for children, 'kōen dowā', was a popular form of amusement from the 1910s to the 1940s. However, before the 1920s, kōen dowā was not made available to teachers because of vulgarities contained in the tales. The aim of this study is to reveal why kōen dowā came to be used in the classroom by the end of the 1920s. The study analyses four documents, as recorded by an early-career teacher, about the storytelling exploits of KURUSIMA Takehiko, who was the most popular kōen dowā performer at the time. From the teacher's documents, the following effective teaching strategies were identified:

- (1) gestures and body language;
- (2) drama techniques – a) vocal dynamics, b) facial expressions;
- (3) verbal techniques – a) vocabularies, b) skits, c) onomatopoeia.

The results of the analysis indicate that the teacher was eager to learn about methods of telling stories to children in a style worthy of emulation.

Keywords : 'kōen dowā' (Japanese-style storytelling), teacher, KURUSIMA Takehiko, gesture, onomatopoeia

1. はじめに

本研究では、小学校教師として活躍した金沢嘉市（1908-1986）が残した記録を用い、師範学校出身の教師が昭和初期に口演童話から何を学び取ろうとしたのかを検討する。この時期の教師の口演童話への取り組みは、大衆的な娯楽として批判的にあつかわれていた口演童話が教育界に受容される過程での営みで、口演童話発達史の一つの段階として注目される。また、子どもの文化の享受には限りがあった戦前期に、教師が学校教育だけではなく社会教育の担い手となり子どもたちに働きかけるようになった点でも考察に値する。

明治期なかばに発祥した口演童話は、昭和戦前期まで児童文化の主要分野として発達した¹。それは数百人規模の子どもを前に日本昔噺、外国の物語、創作童話などを語る実演で、身ぶりや雄弁術的な語りなど日本独自の型を有する²。初期に「お伽口演」、「お伽噺口演」などと呼ばれた口演童話は、「空想をうそであるとするような素朴な合理主義、教訓性が弱いという不満、娯楽を怠惰と同一視するような伝統的見解」が支配する学校教育からは疎外された³。口演童話が教育現場にもちこまれるようになったのは、大正期に入って全国ほとんどの師範学校で童話研究会が結成されるようになってからのことである⁴。そして、「教育としての童話」の語りは、

キーワード：口演童話、教師、久留島武彦、身ぶり、擬声音

*平成28年度生 人間発達科学専攻

戦時下において教育技術として便利に活用されるにいたる⁵。

1941（昭和16）年、戦時体制で児童文化の諸団体が社団法人日本少国民文化協会（以下「少文協」）に一元化され11部会⁶で構成されると、口演童話家から成る童話部会は次第に中心的役割をはたすようになり⁷、少国民育成に大いに協力した。童話部会が国策協力で中心的になった理由を整理すると、（1）人的資源、（2）組織、（3）技術に大別が可能である。（1）は、幹事長となった久留島武彦（1874-1960）以下、同部会には全国に名の知れた童話家が複数おり、事業運営の人材が確保しやすかったこと⁸、（2）は、人気の童話家を招聘する各地の口演童話関係団体が少文協の支部組織として機能したことである⁹。人的資源と組織を考えたとき、教育関係者が多く、少国民の教化に都合が良かった点は見のがせない。（3）は、教育関係者の多さに起因するといえようが、「研究・実践・省察に基づく研究」が繰り返され、語りのための技術が高められていったことである¹⁰。

教育界での口演童話の受容に関しては、複数の視角からの論考がある。思想史と技術に着目し、1915（大正4）年に東京高等師範学校で結成された大塚講話会ほか教育関係者の取り組みを整理した研究¹¹、大塚講話会の活動が社会教育としての広がりがあった点を実証した研究¹²、大塚講話会の影響で東京府青山師範学校内に成立した青山講話会、そこから派生した童話部から教室童話研究会の成立と展開までを系譜づけた研究¹³などである。こうした実績により、口演童話を教育的に研究し実践した主体を焦点化した口演童話発達史の一段階が知られるところとなったが、口演童話のどのような技術が教育的に有意と考えられたかという検討はまだ十分でなかった。その点に着目した論考に、教室童話研究会の理論的支柱だった金沢嘉市の教室童話論を整理のうえ、童話台本に用いられた語りの技術を検討した研究がある¹⁴。また、金沢の防空教育の話材を事例とし、口演童話が到達していた技術の高さと特徴に国策協力の効果が期待されていた点を実証した研究もある¹⁵。

本研究であつかう史料は「昭和三年」と記された金沢の手書き原稿で、当時、童話家の第一人者であった久留島の口演が記録された四つの綴り¹⁶である。そこには、語られた物語だけではなく実演の工夫に関する書き込みがある。この書き込みの要素を分析し、新任教師で口演童話の初学者であった金沢が何を学んだのかを考察すれば、のちの教室童話論、「教育としての童話」の国策協力へ展開する技術的な基礎がための様子を明らかにできる。

口演童話の創始者には巖谷小波、岸辺福雄、全国的な普及の貢献者として久留島の名が挙げられるのが定説である。「口演童話家と称するひとを考えると、久留島武彦に師事し、その影響を受けたというひとが圧倒的に多い」¹⁷という指摘があるが、三者の影響の具体的な検証はおこなわれていない。金沢の記録の分析はまた、技術面での久留島の影響の検証をも可能にし、三大家という第一世代から第二世代への継承で、口演童話のどのような型、技術が確立されていったかを跡づけすることにもつながると考える。

史料の分析に先立ち、第2章では久留島と金沢のかかわりを年譜により整理する。そして第3章において史料の来歴と概要を説明したうえで、分析をおこなう。

2. 口演童話を介した久留島武彦と金沢嘉市

久留島と金沢の関係を確認するため、表1「久留島武彦ならびに金沢嘉市の児童文化活動に関する年譜」を作成した。ここから、久留島と金沢の主たる接点として、（1）1928（昭和3）年開催の帝国劇場家庭娯楽会で金沢が久留島の口演童話を初めて鑑賞、（2）1931（昭和6）年から久留島主宰「回学会」に金沢が参加、（3）1941（昭和16）年創立の少文協童話部会では久留島が幹事長、金沢が幹事に就任、という3点が分かる。

上記から確認できる関係の変遷は次のとおりである。二人には34という親子ほどの年齢の開きがあり、1928（昭和3）年当時には久留島が口演童話の大家であったのに対し、金沢は初学者であった。3年後、金沢が回学会に参加すると二人は師弟関係となり、金沢は久留島から直接、童話の語りを学べる立場となった。それから10年を経た日米開戦当時の1941（昭和16）年には、ともに少文協童話部会という口演童話組織の要職に就き、童話の語りの活動で協力し国家の課題に取り組む立場となった。

金沢は1928（昭和3）年に青山師範学校卒業後、小学校勤務のかたわら口演童話や学校劇の活動にはげみ、満州事変（1931年）に始まるアジア・太平洋戦争期の東京で児童文化に取り組む教師として評判を呼ぶ。金沢には、郷里の蒲郡で小学一年生のとき巖谷小波のお伽口演に引率され、「指輪大名」に感動した経験がある¹⁸。小学校では、お話の上手な女性教師からグリムやアンデルセンの童話、日本昔話などを聞き、金沢が学芸会で語る機会

もあった¹⁹。新任教師時代には、久留島や岸辺の舞台での口演童話を体験し²⁰、初任地の西多摩郡周辺の学校の教師たちに呼びかけて童話研究会をつくった。北豊島郡西巣鴨への転任後は複数の研究会に参加して口演童話を熱心に学び、1938（昭和13）年、大衆化した娯楽的な口演童話のありようを疑問視する教室童話研究会に同人として参加する。同研究会は、創作童話や映画作品の口演化、観客の反応のグラフ化などに取り組み、次第に注目されるようになったが²¹、国家主義、軍国主義的な教育への変化に沿う展開となっていた。初学者時代の金沢は教師仲間や童話家と口演童話を研究したが、久留島という第一人者の実演、指導の直接体験が大きな転機につながったと言えよう。教職のかたわら取り組んだ社会教育的な活動には広がりが生じ、児童文化運動の担い手の一人となったのである。

表1 久留島武彦ならびに金沢嘉市の児童文化活動に関する年譜

西暦（元号）	久留島武彦年譜	金沢嘉市年譜	口演童話関連事項
1874（M7）	[0歳] 6月、大分県玖珠郡森（現玖珠町）に誕生		
1888（M21）	[14歳] 大分中学で英語教師ウエンライトに出会う。子ども対象の日曜学校を手伝う		
1891（M24）	[17歳] 関西学院に転じたウエンライトに従い、関西学院へ。受洗し日曜学校、街頭伝道を経験		
1895（M28）	[21歳] 日清戦争従軍。『少年世界』（博文館）に投稿し、従軍記「近衛新兵」の連載開始		
1896（M29）	[22歳] 帰還後、戦友のついでに巖谷小波の知遇を得る。巖谷邸に寄宿。文学会「木曜会」参加		巖谷小波が京都の小学校で初のお伽口演
1901（M34）	[27歳] 大阪毎日新聞入社。翌1902年より子ども欄『幼稚園』担当。園長役で執筆		
1903（M36）	[29歳] 7月、巖谷の協力で横浜蓬萊町メソジスト教会でお話の会（日本初）。以降、月例化		東京牛込に岸辺福雄の東洋幼稚園開園。保育に口演童話利用
1904（M37）	[30歳] 日露戦争応召、1905年まで従軍		
1906（M39）	[32歳] 3月、東京神田を拠点に「お伽倶楽部」設立。月例で7年にわたり開催。9月、博文館入社。中央新聞で11月創刊の付録「ホーム」（日本初の日曜特集版）専任		
1907（M40）	[33歳] 博文館講話部主任の立場で、『少年世界』読者向けに全国巡回。幻灯と口演童話を提供		『図書館雑誌』でアメリカのストーリー・アワー（談話時間）紹介
1908（M41）	[34歳] 3月から朝日新聞主催の旅行団に参加し、8ヶ国歴訪。のちに野村證券を創業する野村徳七（1878-1954）と親交を結ぶ。童話の語りて身を立てる決意	[0歳] 10月、愛知県平田村（現蒲郡市平田町）に農家の長男として誕生。母親の昔話、仏教信仰に感化され、育つ	
1909（M42）			岸辺福雄『お伽嚙仕方の理論と実際』（明治の家庭社）
1910（M43）	[36歳] 5月、野村の資金援助で青山穂田に早蕨幼稚園開園。桃太郎主義のしつけ教育が特徴。同園を拠点にお話の研究会「回字会」創設。童話専門家が育ち、地方支部もできる		
1911（M44）	[37歳] お伽倶楽部機関誌『お伽倶楽部』創刊。文部省囑託で渡米、婦人と児童の社会教育視察		
1915（T4）	[41歳] 1910年の満州・韓国口演、1914年の満州・朝鮮口演につづき、台湾、朝鮮で童話口演。第二早蕨幼稚園を設立	[7歳] 東部小学校入学。巖谷小波のお伽口演に感銘。翌年、担任教諭のお話に感銘	大塚講話会設立。巖谷小波『桃太郎主義の教育』（東亜堂書房）

中村 教育界における口演童話の受容

西暦（元号）	久留島武彦年譜	金沢嘉市年譜	口演童話関連事項
1916（T5）	[42歳] 『通俗雄弁術』（廣文堂）		帝国劇場家庭娯楽会の口演童話が恒例化
1921（T10）		[13歳] 蒲郡農学校へ進学。卒業前に、教員を日ざす決意	大塚講話会編『実演お話集』全9巻（隆文館）刊行開始
1922（T11）			日本童話協会創立、『童話研究』創刊
1924（T13）	[50歳] デンマークでボーイスカウト大会参加。オーデンセ市民にアンデルセンの功績紹介。記念館設立へ世論を向ける		日本童話連盟創立、『話方研究』創刊。岸辺福雄「喃喃会」結成、『童話の実際と其批評』（丙午出版社）
1925（T14）	[51歳] 7月、ラジオ本放送開始日、童話「貰った寿命」を話す。10月、帝劇でアンデルセン没後50年祭を開催		
1927（S2）		[19歳] 難関の東京府青山師範学校二部に入学	
1928（S3）	[54歳] 『童話術講話』（日本童話協会）	[20歳] 9月から東京府西多摩郡多西村（現あきる野市）に着任。童話の語りと研究を開始。帝劇家庭娯楽会で久留島の口演童話を聴く	
1931（S6）		[23歳] 北豊島郡（現豊島区）西巢鴨第三小学校へ異動。久留島主宰の回字会ほか諸団体の研究会に参加	
1934（S9）		[26歳] 榎葉勇主宰の童話教育会（ひばりの会）同人参加	
1938（S13）		[30歳] 河合徳司らと教室童話研究会結成。大会場での口演童話でも活躍	
1940（S15）		[32歳] 芝区南桜小学校に異動	
1941（S16）	[67歳] 12月、社団法人日本少国民文化協会の創立に当たり、童話部幹事長就任。協会の各種行事で挨拶や講話、口演童話を盛んにおこなう	[33歳] 12月、少文協の童話部幹事就任	
1943（S18）		[35歳] 芝区麻布中央国民学校へ異動。少文協機関誌『少国民文化』に防空話材「闘ふドイツ少年」発表	
1944（S19）	[70歳] 疎開令で早蕨幼稚園閉鎖	[36歳] 愛高国民学校に異動	
1945（S20）	[71歳] 5月、東京大空襲で早蕨幼稚園と自宅焼失		
1946（S21）		[38歳] 東京児童文化連盟結成。救援米懇請運動で東北を回り、児童文化を提供	
1949（S24）	[75歳] 6月、『久留島武彦童話50年記念 海に光る壺』（推古書院）出版	[41歳] 『久留島武彦童話50年記念 海に光る壺』に金沢の「兄弟」掲載	

雨宮衿子・上地ちづ子編、1989「金沢嘉市年譜」『金沢嘉市の仕事2 戦後教育に生きて』あゆみ出版／生田葵、1939『お話の久留島先生』相模書房／上地ちづ子、1985「口演童話とストーリーテリング略年表」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂／金成妍、2017「久留島武彦 年表」『久留島武彦評伝——日本のアンデルセンと呼ばれた男』求龍堂／草地勉、1978「久留島武彦・略年譜」『メルヘンの語部』西日本新聞社／大分県先哲史料館編集、2006『久留島武彦著作目録・口演活動記録』大分県教育委員会／勢家肇、1986『童話の先覚者 日本のアンデルセン 久留島武彦・年譜』わらべの館・久留島記念室／轟義禮、1999『童話の父 久留島武彦翁の生涯』藍書房を参考にし、金沢が戦後、口演童話の活動から退いたため、終戦までの事項で作成

3. 金沢嘉市が記録した久留島武彦の実演の分析

(1) 史料の来歴と状態

史料の旧蔵者は上地ちづ子（1935-2000 /旧金沢嘉市研究会連絡者）である。金沢の没後、直筆原稿の大部分は生地の愛知県蒲郡市に設立された金沢ヒューマン文庫（1993年設立）へ収蔵されたが、当該史料は同文庫創設に貢献のあった上地によって取り分けられていた。

「イタロの話」、「金の蹄」、「狐と熊」、「童話 つばめのお礼」と題された四つの綴りは、いずれも400字詰め原稿用紙²²に黒インクで書かれている。朱筆が確認できる綴りもある。二つ折りにされた原稿用紙は紙ひもで綴じられ、「狐と熊」には灰色、「金の蹄」には青灰色の表紙がつけられている²³。題目のそばに金沢の筆跡と思われる鉛筆での記入があり、「イタロの話」では「久留島先生の話を書き、がきしたもの（昭和三年）」、「金の蹄」では「久留島先生の話を書いて書いて見た（昭和三年）」、「狐と熊」では「書き、がき帳 久留島先生（昭和三年）」、「童話 つばめのお礼」では「昭和三年（久留島先生の話を書いてそれを書いて見た）」と少しずつ文言が異なる。「昭和三年」という書き込みは共通している。

「昭和三年」を表1で見ると、久留島と金沢の両者にとって口演童話の活動上、特筆すべき年である。久留島は54歳で、童話論の講演録『童話術講話』²⁴が上梓される。童話家として身を立てる決意から20年の節目に当たり、話術は円熟の域に達していたことだろう。金沢は師範学校を卒業し、以降40年にわたる教員生活に入った年である。金沢の回想によれば、用意した学級文庫の利用が頻繁で本がすぐに傷むため、私費を投ずるには限界を感じ、本の読み聞かせ、内容の語り聞かせを始める²⁵。そして、1916（大正5）年以來、帝国劇場で春季と年末に恒例化していた家庭娯楽会に出かけ、久留島の口演童話を聴く。金沢はこの経験を以下のように記した。

新聞紙上で帝劇の家庭娯楽会が年末の五日間行われることを知った。それは一九二八年か一九二九年のことであったと思われるが²⁶、その中で早蕨幼稚園長久留島武彦先生の童話があることを知って、西多摩郡から帝劇に出かけて行って、始めて久留島先生の童話を聴いた。モーニングを着て帝劇の舞台に立たれた先生は堂々たる態度で、しかも響きのある声、それだけで会場を魅了してしまうような雰囲気をつくっておられ、さすがに……と驚嘆した²⁷。

このあとに、聴いた話の一つが「イタリヤの炭焼少年が兵隊に志願していろいろと功績をたてていくユーモアに富んだ話」²⁸と説明がある。この内容は金沢が記録した「イタロの話」と一致するため、四つの綴りは1928（昭和3）年に起こされた可能性が極めて高い。

(2) 史料の概要

「金沢嘉市による1928（昭和3）年の久留島童話口演の記録概要」を、表2にまとめた。語られた話以外の書き込みは四綴りの該当箇所をすべて抽出し、項目ごとに整理した。

童話台本の梗概と、原話について判明している点は以下のとおりである。

①梗概

【イタロの話】 勧誘されるまま義勇兵となった炭焼きのイタロは、ドイツ軍との間にある樫の木の爆破作戦のために塹壕を出る。皆が案じていると、イタロは樫の木で見つけた小鳥の子を預けに戻り、再び出て行く。やがて爆音につづき銃弾の音がする。小隊長がイタロは戦死だとあきらめた頃、大けがで戻る。入院して治療が進むと、戦地に戻れば誰が小鳥の世話をするかが心配になる。そこへイタロの働きを聞きつけた皇后が見舞いに訪れる。

【狐と熊】 狐が熊をさそって畑を耕させ、種を蒔く。実った作物の上下どちらがいいかを訊ねられると、熊は下を選ぶ。トマトが実り、収穫を済ませた狐は穴にこもる。熊は下にもあるはずと土を掘るが、収穫はない。翌年も熊は狐にだまされる。次の年に狐が訪ねると、熊は食べていた馬を分けてくれない。狐は熊から、馬の尾をしげると力が出ないので、自分の尾に結んで馬をかじるよう勧められる。狐はそれを実行し、さんざんな目に遭う。

表2 金沢嘉市による1928（昭和3）年の久留島童話口演の記録概要

童話台本題名	史料の原稿枚数 (400字詰)	データ入力後 20字詰め行数 () 内は文字数	刊行の 有無	書き込み
イタロの話	20枚	442行 (8840字)	有 (3種)	①「身ぶり」と記入：4ヶ所 ②身ぶりの例：20ヶ所（うち朱記13ヶ所） ③ト書き：12ヶ所 ④傍線・囲み：17ヶ所（うち朱線12ヶ所） ⑤訂正・補足：11ヶ所（うち朱記3ヶ所） ⑥意味不詳：3ヶ所（うち朱記2ヶ所）
狐と熊	11.5枚	244行 (4880字)	無	①「身ぶり」と記入：1ヶ所 ②身ぶりの例：2ヶ所 ③ト書き：1ヶ所 ④傍線：13ヶ所（うち1ヶ所は大きめの朱の傍点、 11ヶ所は朱線）
金の蹄	8.5枚	181行 (3620字)	無	①「身ぶり」と記入：2ヶ所
童話 つばめのお礼	19.5枚	434行 (8680字)	無	①「手ぶり」と記入：1ヶ所 ②身ぶりの例：11ヶ所 ③ト書き：4ヶ所 ④傍線：1ヶ所 ⑤補足：2ヶ所 ⑥意味不詳：3ヶ所

童話台本の並びは五十音順。童話台本の記録をデータ入力するに当たり句読点を補い、改行、段落づけを適宜おこなった。

【金の蹄】 1616年にドンキヤストがイギリス王の命でフランスに赴くが、フランス王の門番はイギリスを見くだして城内に通さない。困ったドンキヤストは家来の知恵で、馬の蹄に金の靴輪をはめて街を走り、ポケットに入れた別の金の靴輪を毎日、道に落とす。それが評判を呼び、王への目どおりがかなう。馬の蹄は縁起がいいことの由来話だと結ばれる。

【童話 つばめのお礼】 屋根に穴のあいた家族の家に、つばめが巣を作る。ヒナが育つと、つばめが西瓜の種を落とす。種を植えると芽がすぐ出てつるが伸び、屋根がつるに覆われて雨漏りがなくなる。一家は三つなっていた西瓜を収穫して包丁を入れる。すると、一つめからは大工たちが出てきて家を建てると言い、二つめからは壁塗り職人たちが出てくる。三つめからは大量の金貨、銀貨が出る。完成した家は広く、子ども部屋、遊び場も備わっている。

②原話について

表2のとおり「イタロの話」には出版物が3種ある。久留島お気に入りの話材だろう。『久留島武彦著作集総目録』（1989）²⁹、『大分県先哲叢書久留島武彦評伝別冊 久留島武彦著作目録・口演童話活動記録』（2006）³⁰に当たったが、「イタロの話」以外は出版を確認できない。「イタロの話」以外の3本は久留島のレパートリーとして貴重な記録と言える。

判明している口演を『大分県先哲叢書久留島武彦評伝別冊 久留島武彦著作目録・口演童話活動記録』で確認すると、日付、場所、主催者、事業名の記録はあるが、話材の記録は少ない。物語の展開から推察すれば、「イタロの話」は「爆弾下の小鳥」という題で、1921（大正10）年7月に中津高等女学校、佐伯小学校を会場に大分新聞主催「お伽講演会」で語られた。また、「四つ目のイタロ」という題で、1928（昭和3）年4月に別府市公会堂、大分市昭和座を会場に日本児童芸術協会主催「童話と民謡少女舞踊音楽会」で語られた。「童話 つばめのお礼」は「燕の恩返し」という題で、1935（昭和10）年6月に名古屋鶴舞図書館「児童大会小波祭」において語られた。

金沢が記録した「イタロの話」は幼児にも聞ける語り口だが、文学化作品3種は青少年向けである。第一に、1923（大正12）年刊『長靴の国』（丁未出版社）中に題名「小鳥の戦友」で展開が同じ物語がある。第二に、1936（昭和11）年1月刊の月刊雑誌『少年倶楽部』（講談社）に題名「小鳥の戦友」で表現の異なる小説がある³¹。第三

に、1937（昭和12）年刊『イタリー愛国物語——水雷勇士』（新潮社）中に題名「死骸は此処に居ります」で、作風が別で内容の同じ小説がある。「イタロの話」の原話はイタリアの伝承と考えられる。

「狐と熊」は岡山県採集の日本昔話に「熊と狐」³²があり、物語の展開がほぼ一致する。「童話 つばめのお礼」には福岡県採集「腰おり雀」³³、鳥取県採集「つばめの報恩」³⁴といった、けがの介抱に対する報恩譚の類話があるが、類話は朝鮮民話にもある³⁵。口演童話の海外由来話には、日本昔話として語られるようになった例もある³⁶。したがって、久留島の「狐と熊」、「童話 つばめのお礼」が日本昔話を下敷きにしたという特定は控える。

「金の蹄」は年代と固有名詞の含まれる伝説的な内容で、海外の物語の翻訳・翻案と思われるが、出自は不明である。この原話の特定にはさらなる調査を必要とする。

（3）台本への書き込みに関する分析

①身ぶりに関する書き込み

身ぶりについての書き込みは、「イタロの話」で24ヶ所、「童話 つばめのお礼」で12ヶ所ほか、四綴りで合計41ヶ所を析出した。「ミブリ」、「手ブリ」と記された8ヶ所を除いて具体例を挙げると、「手コシ」、「手顔」、「頭手」、「手ブリ 手ぬぐい、ハンカチでふく手ぶり」、「コッコツ杖」、「両手でいっしょに」、「アクビ ノビ」、「シッシ」、「手を組み」、「手上」、「指下にして」、「自分の顔」、「軽く手を」、「手振りを主として」などで、手に関する書き込みが23ヶ所ある。それ以外は「ツバキヲノミコミ」、「コシカガメ」、「体全体」、「考えて」など行動に関わる書き込みが6ヶ所、「ぢろぢろ見ながら」、「二つ□ヲ見ながら（目）」³⁷、「時計を見て」、「種と上を見ながら」といった目の動きに関する書き込みが4ヶ所である。「イタロの話」のみ、赤インクペンと赤鉛筆での記入³⁸が13ヶ所ある。

以上が内訳だが、ここで、口演童話の特徴とされる身ぶりについて実践者の受けとめ方を確認しておきたい。金沢が初学に用いた『実演お話集 第九巻 話方の研究』（1926／以下『話方の研究』）には、身ぶりの必要性が論じられている。「児童の眼の前に話を具体化して見せるには、身振が最も直接で、又容易で且つ自然なる方法」とされ、「お話に於ける身振りは、写実が主でなくて、気分を出すこと一象徴的な表現が肝要」、「非常に必要な部分々々に、巧みに強く入れる事によつて、十分なる効果を挙げる事が出来る」といった記述がある³⁹。全361頁のうち57頁が身ぶりに割かれている。身ぶりに限らず、同書は巖谷、岸辺、久留島ら大家の実践に学んで書かれたことが具体例で分かる。著者の大塚講話会は、東京高等師範学校を拠点としていた。師範学校出身の金沢は同書で理論を学び、久留島の実践に接し、身ぶりの効果を確認したと推察される。

久留島の『童話術講話』（1928）に当たると、「肩と腰の決め方」として姿勢にふれた以外、身ぶりを論じた箇所はないが、『通俗雄弁術』（1916）中で「手足は能く働くもの」⁴⁰として充分な使用を勧奨し、「頭の先きから足の爪尖まで、即ち人の眼に触れる身体のすべての部分によつて表はされる動作」⁴¹による演説中の態度の大切さを説いている。

では昭和初期、教師にとって身ぶりが持つ意味はどのようなものであったか。『話方の研究』中の「教育の仕事に携はつてゐる方々のお話」に、今少し身振を思ひ切つて入れて戴き度いと思ふ、「学校の教壇で話す場合に、余り多くの大袈裟な身振りをする事は、余程警戒しないと、其演者の品位をおとすやうな事になり易い」といった記述から⁴²、教師の身ぶりは好ましくないとする風潮が読み取れる。ましてや師範学校出身ともなれば、大衆的な口演童話を真似る活動には慎重にならざるを得なかっただろう。以上から、史料の身ぶりに関する書き込みは、教場にふさわしい「象徴的な表現」の研究の跡と把握される。

②ト書き

前項①で検討した身ぶりもト書きに含まれるが、ここでは、身ぶりを除いたト書きを対象とする。ト書きは「イタロの話」で12ヶ所、「狐と熊」で1ヶ所、「童話 つばめのお礼」で4ヶ所、合計17ヶ所を析出した。内容を分類すると、「大声」、「ユックリ」、「ひくめて」、「だんだん大きく」といった音声に関する書き込みが6ヶ所、「驚いて」、「ねむそうに」、「怒りっぽく」、「小僧の如く」など様子を表す書き込みと「一寸説明」、「喇叭」、「イビキの音」、「間」など演出事項の書き込みが各4ヶ所、「困り顔」、「にっこりにっこり」、「やさしい顔」といった表情を示す書き込みが3ヶ所である。

上記のうち音声に関するト書きは、実践者が語りを研究するに当たり、当然学ぶべき要素と理解できる。『話

方の研究』では「音声の研究」に約24頁が割かれている⁴³。その項目は、練習で音声に変化すること、話に適した音声の特徴、音声の工夫と訓練、声の保護、擬声音の活用、感情表現、会場都合である。また、久留島の『童話術講話』には、心持ちを表す響き、呼吸の調節と姿勢、声の種類、模声についての説明がある⁴⁴。身ぶり同様、口演効果を高める要素として、金沢が音声を意識的に研究していたことがうかがえる。

音声以外の要素として、様子を表すもの、演出事項、表情が析出されたが、書き込みのほとんどは語る話の場面や内容にふさわしい雰囲気を作る工夫である。こうした工夫が演劇用脚本のト書きと同様のはたらきをすると考えられることから、史料のト書きに関する書き込みは、口演童話の演劇的な特徴の抽出と把握できる。

③傍線・囲みについて

次に、傍線が引かれた部分、および文章が線で囲まれた部分の分析結果を述べる。該当箇所は「イタロの話」で17ヶ所、「狐と熊」で13ヶ所、「童話 つばめのお礼」で1ヶ所の合計31ヶ所であり、そのうち朱筆での記入は「イタロの話」で12ヶ所、「狐と熊」で傍点を含めて12ヶ所、計24ヶ所である。「イタロの話」では11ヶ所で赤鉛筆、1ヶ所で赤インクペンを利用している。「狐と熊」では12ヶ所すべてが赤インクペンの書き込みである。朱筆は黒インクペンで童話の語りを記録したあとに加えられたと考えられる。「イタロの話」と「狐と熊」に書き込みが集中しているのは、金沢が実演を検討した跡ではないか。

傍線が引かれた部分を色で分類してみる。「イタロの話」では黒インクペンによる傍線は「名ジ」、「たんか」、「金のかご」、「クンショウ」、「ガイセン」という5つの言葉に付されている。「イタロの話」の中で、「ザンゴウ」という言葉に「一寸説明」というト書きが添えられていることから、意味の説明が必要な言葉の横に線を引いた可能性がある。朱筆による傍線は、「水筒を三〇も四〇ももって平気で」、「夜てんこが終るとまっ先きにふとんの中へ」、「尊い戦勇士に見えます」などイタロの様子を説明した部分が5ヶ所、「しずかにカチカチ」、「[[前略]すかさず、大砲機関銃、小銃の音の物凄く ドーン ドーン ドッドッ ドッドッ」、「フーフーと吹いて」、「シッシシッ」などオノマトベの含まれる部分が4ヶ所、「少しいたいのでございます」、「あのお小鳥はどこに居りますかな」、「じゃ、おかみさん、もらってくださいますか」など、滑稽味が表現されている台詞が3ヶ所である。

次に「狐と熊」であるが、黒インクペンによる傍線は「とまと」の1ヶ所である。赤インクペンによる傍線は、「おいおい一寸狐さん」、「秋になってから実がなって」、「種を蒔いて秋を待っておるなんて随分のんきなことをするもんだね」、「あ、一寸それ前に、あの熊さん約束がある」、「熊さん熊さん、見てばかり居ないで、あなたのその手を土をかぶせて下さいよ」など台詞の9ヶ所に引かれている。そのうち言葉の繰り返しを含むものが6ヶ所あり、4ヶ所は熊のひとり言である。台詞以外に傍線（傍点も含む）が付された部分は「のっそりのっそり」、「よっこらさ、えっこらさ」、「よいしょ、よいしょ」というオノマトベの3ヶ所で、台詞に引かれた傍線の中にも「ぼっつり ぼっつり」というオノマトベを含むものがある。

金沢の教室童話の台本を分析した研究では、音や言葉、フレーズの繰り返しかえし、台詞の多用が、子どもの発達に配慮した表現の工夫として指摘された⁴⁵。史料中の傍線が付されたオノマトベを含む音や言葉、フレーズの繰り返しかえし、ひとり言を含む台詞の入れ方を追うと、金沢の注意が向けられた箇所が金沢の童話台本の特徴と一致する。

オノマトベの一部である擬声音については、『話方の研究』に「聴衆の注意を纏める上にも、話に活気と変化をつける上にも、非常に効力のあるもので、是非研究しなければなりません」⁴⁶と強調されている。そして、「日頃真面目な神聖な教壇上から、いくらお話といつても、変な動物の啼き声を入れたり、芝居がかつた声色を使つたりする事は教育者の威厳に関する」⁴⁷と相談があると書かれ、擬声音が身ぶり同様に、教育者が取り組むべき口演童話の課題である点が指摘されている。以上から、傍線と囲みの書き込みは、用語、台詞、擬声音などの言葉の表現に意識的な学習者の視点が投影されたものと受けとめられる。

4. おわりに

口演童話の一つの定型を築いた久留島の活躍期に、生の語りに接した金沢が何を学んだのかを探った。金沢は久留島の話を手稿用紙に記録し、口演効果を高める要素も書き込んだ。その書き込みを、①身ぶり、②ト書き、③傍線・囲み、に分類して検討したところ、各々に①教場にふさわしい「象徴的な表現」の研究の跡、②口演童

話の演劇的な特徴の抽出、③用語、台詞、擬声音など言葉の表現に意識的な学習者の視点、が観察された。この結果から、久留島の語りの技術に意欲的に学ぶ教師の姿勢がうかがえた。また、『話方の研究』の参照により、金沢が特に身ぶり、擬声音といった職業的な童話家の専門技術に注意を向けた点が分かった。いずれも、昭和初期の教師たちには抵抗のあった表現方法である。手の動きに関わる書き込みが多い傾向は、手ぶりというもののが自然で小さな動きでも注目を集められる技術で、姿勢を正して話す教師には取り入れやすかったためと推察できる。

『話方の研究』では、教室のお話会であっても「日頃の授業とちがった気分をつくる事」⁴⁸が推奨された。金沢にしてみれば、劇場に行けない貧しい農村の子どもたちを相手に、自分が久留島のように語れば文化的な体験をさせられるという思いがあったことだろう。金沢が日常的な教室童話をより効果的に実践できるよう、また、子どもたちの反応を引き出せるよう研究しつづけた成果は、のちの教室童話論に結実していった。本研究では、その理論を獲得していく過程での、学びの具体的内容を新たに明らかにすることができた。

金沢が久留島の語りから学び取ろうとした身ぶり、演劇的な工夫、台詞や擬音など言葉の表現といった口演童話の技術は、職業的な童話家が身一つで、子どもたちに一流の文化施設での口演と同様、心を動かす体験をさせられる手立てであった。久留島もまた、必ずしも華やかな舞台ばかりだけではなく、鉄道もバスもない土地へは自転車や馬を利用し、「場所はお宮の石段でも賽銭箱の横でもかまわない」と出かけ、話を披露したという⁴⁹。その一方で、身一つで取り組める口演童話は、物資の窮乏した戦時下にあっては国策協力に都合よい簡便なメディアとして、子どもたちの思想涵養にはたらいた。子どもの教化を支える形で発達した口演童話の実践については、今後もさらなる考究を重ねたい。

【註】

1. 口演童話の創始を1880年代の仏教の少年講に求める説もあるが、ここでは後述する「日本独自の型」を尊重し、1890年代なかばの巖谷小波（1870-1933）と岸辺福雄（1873-1958）の取り組みを創始とする説を取る。
口演童話が「児童文化の代表的な形で普及してきた」という記述が内山憲尚、1972「口演童話」滑川道夫・菅忠道編『近代日本の児童文化』新評論、p.164にあり、また「児童文化そのものがまだ未発達、未分化の状態であった早い時期に、口演童話はその軸の役割をになっていたのではないか」という記述が堀田穰、1987『図書館・ものがたり・都市』青弓社、p.55にある。
2. 口演童話の語りの型については、富田博之、1985「日本のストーリーテリングとしての『口演童話』」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂、pp.43-63、磯辺孝子、2000「名古屋と周辺地域の口演童話活動」中京大学文化科学研究部編『愛知の児童文化』KTC中央出版、pp.35-66などに詳しい。
3. 菅忠道、[1956]1966『日本の児童文学』増補改訂版、大月書店、p.46
4. 上地ちづ子、1997「口演童話の方法と思想」日本児童文学学会編『研究＝日本の児童文学2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍、p.179
5. 一例として、口演童話が防空教育に用いられた事例を扱った中村美和子、2017a「戦時下の口演童話に見られる国策協力の検討」『人間文化創成科学論叢』（20）、お茶の水女子大学、pp.155-163
6. 文学、絵画、童話、遊具、紙芝居、演劇、映画、舞踊、音楽、蓄音器レコード、出版。
7. 少文協における童話部会の活動展開については中村、前掲、2017aに詳しい。
8. 中村、前掲、2017aによれば、新井太郎、樫葉勇、原勝など幹部のほか、童話部会の会員複数が事業に協力。
9. 日本童話協会支部の活動内容、名簿の記載が内山憲尚編、1972『日本口演童話史』文化書房博文社にある。
10. 1938年9月創刊の機関誌『教室童話』（1942年2月までに謄写版印刷で計16号刊行）において、土日に会員の勤務校でおはなし会が開催され、それを受けて会員による研究会がおこなわれていた様子が分かる。
11. 上地、前掲、1997、pp.169-196
12. 鳥田剛志、2012「教育的文化活動に関する歴史的考察——口演童話を中心として」『教育デザイン研究』（3）、教育デザイン研究会、pp.58-65
13. 浅岡靖央、2011「口演童話と『教室』——青山師範学校における口演童話運動の系譜」『子ども学論集』（4）、日本児童教育専門学校、pp.23-30
14. 中村美和子、2017b「教室童話が意図した〈教育としての童話〉の語り——金沢市の童話台本の分析から」『子ども社会研究』（23）、pp.146-148において、子どもの心の育ちに配慮した形式的なリズムのある音や言葉、フレーズの繰り返しかえし、登場者たちの発話・会話で物語を進めることが挙げられている。
15. 中村、前掲、2017a

16. 史料の来歴ほかは第2章に詳述。
17. 富田、前掲、1985、p.60
18. 金沢嘉市、1985「私と口演童話」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂、pp.64-84
19. 金沢嘉市、1986「金沢嘉市・教育と文化をたどる（4）「お話」を聞いた子ども時代、聞かせた教師時代」『子どもの文化』18(7) 192、pp.52-53
20. 金沢、前掲、1985、p.69-70
21. 前掲の機関誌『教室童話』により確認。
22. 使用された原稿用紙の罫線は茶色で、「イタロの話」、「童話 つばめのお礼」の方には「エトアール印 十行 廿詰」、「狐と熊」、「金の蹄」の方には「十行 廿詰」と欄外に印刷がある。いずれにも「68」という商品番号と考えられる数字が印刷されているため、同じ製造者による原稿用紙であろう。
23. 「金の蹄」の方の洋紙は、本体といっしょには綴じられていない。
24. 久留島武彦、1928『童話術講話』日本童話協会（復刻版は日本青少年文化センターより1973年刊）
25. 金沢嘉市、1967『ある小学校長の回想』岩波書店、p.6
26. 東宝(株) 帝国劇場、1966『帝劇の五十年』年表の1928（昭和3）年12月22日欄に「演目：吉例家庭娯楽会；出演者：久留島武彦、高峰筑風、柗屋佐吉社中、専属男女優；期間：12月29日（正午）まで」とあるが、1929年に家庭娯楽会の記録はない（オンライン版https://shashi.shibusawa.or.jp/details_nenpyo.php?sid=14940&query=&class=&d=all&page=38、2018年11月25日取得）
27. 金沢、前掲、1985、p.69
28. 同上、p.69-70
29. 勢家肇編、1989『久留島武彦著作集総目録』勢家肇自費出版
30. 大分県先哲史料館編集、2006『大分県先哲叢書久留島武彦評伝別冊 久留島武彦著作目録・口演童話活動記録』大分県教育委員会
31. 大分県先哲史料館編集、2001『大分県先哲叢書 久留島武彦 史料集』第2巻に再録
32. 関敬吾編、1956『日本の昔ばなし（Ⅰ）こぶとり爺さん・かちかち山』岩波書店に所収
33. 関敬吾編、1956『日本の昔ばなし（Ⅱ）桃太郎・舌切り雀・花さか爺』岩波書店に所収
34. 土屋タマ、1976「つばめの報恩」立石憲利・山根美佐恵編『日本の昔話14 出雲の昔話』日本放送出版協会に所収
35. 金素雲編、1953『ネギをうえた人 朝鮮民話選』岩波書店所収の「カボチャの種」の注に「わかりやすいようにカボチャとしましたが、ほんとうはカボチャでなく、わら屋根につるをはわせた大型の『夕顔』のこと」とある。
36. 櫻井美紀、1997「口演童話から語り手運動まで」『岩波講座 日本文学史 第17巻』岩波書店、pp.107-108
37. □は判読不明
38. 「イタロの話」では、身ぶりに関する書き込み以外に、傍線と囲みの12ヶ所、訂正と補足の3ヶ所も赤鉛筆で記入がある。また、イタロの発話部分に赤鉛筆による台詞の書き足し、台詞の表現の書き直しもある。
39. 大塚講話会、1926『実演お話し集 第九巻 話方の研究』隆文館、p.214; p.222; p.225
40. 久留島武彦、1916『通俗雄弁術』廣文堂書店、p.48
41. 同上書、p.53
42. 大塚講話会、前掲、1926、p.217; p.219
43. 大塚講話会、前掲、1926、pp.270-295
44. 久留島、前掲、[1928] 1973、pp.47-98
45. 中村、前掲、2017b
46. 大塚講話会、前掲、1926、pp.287
47. 同上書、p.289
48. 同上書、p.3
49. 草地勉、1978『メルヘンの語部 久留島武彦の世界』西日本新聞社、p.8